
蜘蛛絵図 [クモアート]

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜘蛛絵図 「クモアート」

【Nコード】

N4486F

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【? / 前後作】 TCG専門店で働く澤田店長と、毎日巢または網作っている蜘蛛とが織り成すのはアートな世界。お互いはどうなっちゃうのか? いや、どうもなりませんよ。

前編

頭を悩ませている問題がある。プレハブ小屋に毎日、巣または網作っている蜘蛛のことだ。

俺は学生の頃からトレーディングカードゲームに興味を持ち始めた。TCGと略されるが、能力値やキャラクターの秀麗イラストがかかれたトレーディングカードをテーブルに並べて相手と戦闘を繰り広げる対戦型ゲーム。使用するトレーディングカードを買って集めなければ始まらない訳だが俺はまず、数十枚、とカードが初心者用に構築されたデッキ（セット）を購入し、それを基に各地の書店やゲームショップの片隅で行われている大会に顔を出してみた。それからというもの、大会は公式・非公式・ただの野郎集まりなど、形式に関係なく何処であろうとも積極的に参加するようになっていったのだった。

カードも始めはデッキひとつで頑張っていたのだが、やはり物足りなくなり数枚入りで売っているブースターパックを買い出すようになった。どんどんと深みに嵌められていくようで、毎月の小遣いやバイトの給料の占める出費の割合も一緒に大きく膨らんでいった。デッキケースの柄にこだわり、勿論常識だがカードは1枚1枚をスリーブと言われる外装フィルムに入れるようにして、財布の景気のいい時はブースターもBOX買いをするようになった。必要のないカードや重複したカードは試しにネットオークションで出品してみたら買い手がつき儲かったのに味をしめ、今後の小遣い稼ぎの手段のひとつになっている。旬な時は万単位で取引可能だった。気分はかなりの悦である。しかし直ぐに次なるカードへの出費へと……金は消える一方なんだがな。とほほほほ。

と、まあ。そんな学生の時分が過ぎようとする頃になってからだ。俺は将来のことを四六時中考えるようになっていた。いや、もつと昔から考えてはいた。ただぼんやりと、想像できない自分の姿を。どうなっちまうんだろうかと常々に。あっちゅう間に時は過ぎたがな。

さあこれからフリーター突入かと思われた矢先だったんだ。俺は幸運にも矢坂というTCG界じゃ帝王とも呼ばれる男と出会った。ほんのしょぼくれた小さな大会で対戦相手として出会い、俺はありつたけの力で奮闘したが2回戦で惨敗し。握手した後色々と身を明かして話し、会話は弾んで意気投合した。そして。

何と店を経営することになった。

帝王・矢坂という男はTCGを含め市場では様々な実績を残している男だったようで、会社をする傍ら俺のような暇人を見つけては『どうだやってみないか』と声を掛けているんだそうだ。ははあ。

最初、右も左も訳わからん状態だった俺だが、事務の加代子さんと来^{ライ}さんが力になってくれて俺は大いに助かっていた。2人とも接客の方が向いてそうなるほど笑顔がチャーミングな女性で、もし自分に妹がいたらこんな双子が欲しいぞと思えてしまった。普段他愛ないおしゃべりでは、にこにことしていて笑いも引つ切り無しに続くのだが、仕事となるとその様相はガラリと変わり。俺は天使から地獄の鬼にでも化けたような2人にしごかれ尻に火がつき、休まる余裕もまるでなかった。

先が全く見えず頼りなく始めた我が店の名は“カ・ミューン”。別に俺の名がカミオだからだとか、そんな理由ではない。俺の名前は澤田慧^{けいた}太だ。店の名前は単に英語の“カモン^{おいで}”をもじっただけである。

さて。このTCG専門店の店長ではあるが。実は矢坂さんや事務のお姉さん方の下っ端という素晴らしく微妙な立場にいる俺の。今

一番の悩みとは。

冒頭でお伝えした。

店であるプレハブ小屋に毎日巣作っている蜘蛛のことである。

どのように巣を作っているのか。そう、普通なら。部屋の角隅や人目のつきにくい所など、蜘蛛も自らの立場をわきまえて住処を構えているもんだと思っていた。しかしだ。店の。

屋内堂々と中央に蜘蛛はどんとこせと巣作って居座っていたのだ！レジカウンターから見て左から右からと、TCG関連商品がズラリと並んだシヨウケースの上、天井から近く、蜘蛛のチラチラと蛍光灯に照り光る糸はダラリと軽くしなつてはいるが、長くてまるで暖簾のれんのように垂れ下がっている。

しかしその暖簾が1本や2本の筋ならまだよかった。すぐ切れそうなものだ。だが。

困ったことにその暖簾はとびきりの芸、術、作、品、だった。

「何だとお……」

最初は誰かがペルシャ絨毯でも買ってきて洗濯し干しておいたのかと思った。それほどまでに、まさに縦糸と横糸で器用に『編みこまれ』た芸術の模様。それが蜘蛛の糸だと判明したのは少し間を置いてからだつたが。の出現に、俺は度肝を抜かれてしまった。

それを初めて目にした日の朝を振り返っておこう。

いつも俺は。店を開けようと定時である朝の9時に車を飛ばしてやって来て、警備のかかったドアを開ける。それから売場へと突き進んで開店準備の開始だ。そのはずだったんだ。だがそこで……俺はいきなりアーチックな世界へいらっしやいませと踏み込むことになつてしまった。

う、美しい。

奇跡だ。

俺はしばらく呆然と、それに魅入ってしまった。

左右の壁の狭間でまだ照明を3分の1しか点けてはいない薄明かりの中で。この『作品』は俺に衝撃と感動を与えてくれたのだ。

時間だけが過ぎていく。何処かでカツチコツチと鳴る時計の音がよく響いている。冷え錆びた……幽玄の世界だ。いつそこには時間が存在しない……。

……なんて昇天した顔でウツトリ堪能していたら。

「何やってんの、澤田君」

名前を呼ばれ俺はハツとして現実に舞い戻ってくる。背後から浴びせられた声の主を確認する前に俺は高く掛けられていたアナログ時計を急いで見ると、10時5分。「やべ……」

開店時間をとうに越えていた。ここに来たのが9時10分頃だったから、1時間近くもこんな所で突っ立っていたということか。何てこった！

「すみません加代子さん！ ついあれにみとれて……」

俺の後ろに立っていたのは事務の加代さんだった。白のスカートスーツに白のヒールを履いている。耳元のシルバーのピアスが輝いて、微かに甘い香水の匂いが漂った。

「何なのこれ。新しい趣向？」

加代子さんもキョトンとして巢を見ていた。

「んな訳ないですよ。昨日の帰りには無かったのに、たったひと晩でこんな……」

俺は頭を掻きながら、さてどうしたものかと悩んでいた。

「まあ、とにかく邪魔ね」

加代子さんはすぐ傍の壁に立てかけてあった軽めの箒はらであっさり
と巢を払いのけてしまった。「ああ！」

俺からつい声が漏れ出す。「何よ。だって営業妨害じゃない」

加代子さんに躊躇や情けはなかった。やがて巢は全て箒に絡みつき床にも落とされ、回収され水で洗われ最後に排水口へと消えてい

った。

それからというもの。

蜘蛛の糸は、毎朝毎朝と。芸術作品を俺に見せつけてくれるようになったのだった。

始めの方は曼荼羅やら幾何学模様やらベイズリー柄やらと『柄』で俺を圧倒させ攻めていたのだが、次第にモナリザやヴィットーレ・カルパッチョ、葛飾北斎と『絵』で攻めてくる。そして今度は芸能人やミュージシャンなど、『人物』を糸で表現してくれた。

素晴らしい。ただただため息をつき驚嘆するばかりだ。

思わず携帯で写真を撮り、今度金銭に余裕があればデジカメを買って被写体をちゃんと撮って収めようと思っていた。

「ふん！」

思い切る鼻息の音をさせて毎日奮闘しているのは加代子さん及び来さんだった。毎日毎日、箒で巣の撤去に励んでいる。

「見てないで何とかしなさいよ！」

時々俺も怒られる。言われて渋々、買ってきて増えていく箒の1本を手に取り撤去作業に協力する。加代子さんの言う通り、これは営業妨害だな、確かに。

何て蜘蛛の巣発見から2週間になってようやくそれに気がついた時。

もう1つ気がついた。『奴』は、何処にいる……？

俺は初歩的なことに気がついたのだ。巣の『家主』をまだ見ていないと。会ったら会ったでこんにちは精が出ますねと挨拶の1つはしてみたいもんだと思うが、一向に姿を現さない。これはおかしい。まさかシャイなのか。

「あーもお！ 毎日毎日い！ こうなったら……！」

ある日ついにキレた加代子さんは、その細い腕で隠された所に仕舞われていた必殺凶器を持ち出してきた。グレー色のスプレー缶。

商品名は『ムシ・コロース』。ネーミングに捻りもなく殺虫スプレーだ。

「何処に潜んでいるのかしらね……?」

加代子さんの目の奥が妖しく光る。何処か芝居がかっている加代子さんの風体。「イーヒツヒツ……」素でないことを祈るばかりだ。「こら加代。今そんな物を振りかけちゃ、臭いが付いて商品が傷んじゃうでしょ。とにかく、澤田店長。このままでは迷惑ですので、今夜何とかして下さい」

後から出勤してきた来さんが俺にそう言うてきた。

「へ? 今夜?」

「だって閉店後に活動してるんでしょ蜘蛛。だったら待ち伏せて、話つけてきて下さい」

蜘蛛と?

俺の目に映っているのは、ムシ・コロースを片手に店の隅々にまで目を行き届かせて獲物を探している屈み込んだ加代子さんの背中と、とつと必要な書類を持って持ち場へと戻って行くこととする来さんと。フォトフレームに入れられ毎日1つずつ増えていく蜘蛛の糸作品を撮影しプリントされた写真が飾られた壁。

これが俺の店長ライフなのか。……何で。

今日は木曜日。発注した新商品がどつと勢いよく届き、接客傍ら朝から商品の整理と陳列とに追われ大忙しだった。客の年齢層は主に子ども。プレハブ小屋という、こじんまりとした店でもあったので、たった十数人の人間が来ただけで屋内はもう満員だ。金銭的に人も雇えない自分とあっては、基本ひとりで頑張るしかない。事務の加代子さんと来さんが開店当初から応援に手伝ってくれているのでかなり助かってはいるが、本当にひとりだけでしようものなら相

当の覚悟を用意しておいた方がいいだろう。とても好きでないや
つていられない。

午後からは公認の大会だったが、特に問題はなく時間は過ぎてい
った。

さあこれから夜。

俺は売上集計、荷物の整理、売場の掃除、明日の発注確認など日
課を終えてパイプ椅子に腰かけて休んでいた。店を閉めてから数時
間。忙しかった今日はいつもより作業に時間がかかり、もう日が変
わろうとしていた。

カッチコッチ。静かな店内に時計の音は規則正しく音を立てる。
椅子に腰かけて売場を見渡し眺めながら、自分の人生というものを
考えていた。

俺、このままここにいていいんだろうか。

途端に顔が曇る。心に影を落とす。俺は少し不安になった。

壁際には、本日入荷した商品も含めTCGのBOXや関連商品と
してファイルやスリーブ、フィギュアなどが並んでいるショウケー
スが場をとっている。壁にはキャラクターや予定が書かれた広告ポ
スターが貼られて見るにとても賑やかだった。

2次元的な物はここにたくさんあるが、人間は今俺しかない。
ひとりだ。

もうかれこれ上京してから何年経ったのだろうか。親父とおふく
ろ、元気かなあ……。

俺はウトウトと、疲れもあつて椅子に座って腕を組んだままうた
た寝をしてしまっていた。時計は、午前2時を迎えている。

「クシユン！」

すっかり寒々とした売場で自分のくしゃみとともに目が覚めた。
そして仰天だ。俺は即座に立ち上がる。ガタ。激しく椅子を動かし
ていた。

オツカレサマ。

蜘蛛の巣には、カタカナという日本語の文字ではつきりとそう書かれていた。

「蜘蛛の野郎……」

テカテカと光る蜘蛛の糸。朝になれば、ウチの事務のお姉さん方に取っ払われてしまう少し可哀想な糸。短き時の芸術。

「ちきしょお……」

俺がそう呟いてしまったのは、別に加代子さん達や己の運命を呪つてのことではない。今、俺の目尻に溜まった水の粒に対してだ。ちきしょお、何で涙が出るんだよ……。そう思いながら拭くと、涙はもう出ては来なくなった。「本当によ……」

困った奴だぜ、ともうひと言漏らしながら俺は裏に置いてある篋を取りに売場を歩いて出て行った。

前編（後書き）

《後編に続く》

後編

それからまた数日。奇妙なことに、蜘蛛はあの『オツカレサマ。』と書いた日からは文字で表現するようになっていた。少しだけ紹介すると。

『いらっしやいませ』

『まいどおおきに』

『また頼んます』

『金出さんかいワレ』

接客用語ばかりだった。こちらの深層心理まで見抜いている。

俺は段々と蜘蛛に会いたいと思いつき始め、日増しに強くなっていった。ある日業を煮やした来さんに「何とかしなさい」と再度注意され責め付かれて。俺はまた、蜘蛛が現れてくれるのを待つために閉店作業後に待ち伏せをすることにした。

今はもう11月。秋も終わりに近づき、店の前の通りは近所から運ばれてきた落ち葉で彩られている。木枯らしは吹き抜けようと忙しく駆ける。夜になってますます冷やさされた風は隙間を縫って店の中に侵入し、俺の体温を奪おうとするのだ。電気代をケチってエアコンをつけられない俺を苛める風だ。

このままでは風邪をひいてしまうので、毛布を持ってくる。それに身体を包ませて、パイプ椅子の上に足を上げて胡坐あぐらをかいて座っていた。服の中にカイロを2、3個しのばせている。

お願いだから早く登場してくれよと乞い願っていたらだった。俺の希望通りにか、姿を見せてくれた。

何と、人のお姿で。

白い着物を着た長い黒髪の女だった。一体何処からやって来たのか判らなかったが、俺にはその女がまるで幽霊のように思われた。ぼんやりと、淡い光で女の身体は包まれている。その儂げな存在に俺は息を呑みながら相手がどう話し掛けてくるんだろうかと待っていた。やがて女は細い声で身を明かし始める。

「私は7年前にこの地で首を吊った女です……」
と、知らなかった……というよりも知りたくもなかった事実を教えてもらってしまった。聞いた途端に身の毛がよだつ。

俺は塩は何処だと叫びたくなつたが、女のあまりにも悲しげな表情に、俺の動揺は引っ込んでいってしまった。落ち着き、俺は女の話に耳を傾けた。女は切々と訴えてくる。

「当時は景気もよく、私もそれに乗っかって生活に困らない程度に過ごしておりました。ところが。とんでもなく綿密な手口の詐欺と、旦那のお家騒動に遭い私は借金をし精神的に追い込まれ。そして最期は……うっ」

女は床に突っ伏し、さめざめと泣き出してしまった。俺はどうしてよいか判らず、ただ、女の肩を軽く叩くか撫でてあげようとした。だが、触れても触れても。手は女の身体をすり抜けてしまっていた。俺はすっかり混乱して、まだ床でうつ伏せて泣き続ける女に聞いてみる。

「あの。おたく、蜘蛛さんですか？ 毎晩アーチックに精力活動を続けていらつしゃる……」

どう聞いてみたものかと思うが、とにかくそう尋ねてみた。すると顔を上げた女はぼうつとして。だがすぐに察したのか、「ああ」と頷いた。

「ボスのことね。この辺りを取り仕切っている……私が幽霊になれたのも、ボスの温情のおかげで」

俺は眉をひそめた。「ボス!？」俺の反応に女はますます首を傾げる。

「ええ。ここで何かしら活動するには、必ずボスの許可が要るのです。私も含め、人型になれず魂だけでさまざまに迷っていたんですけど、見るに見かねたボスがこんな私に声を掛けて下さり、生存していた頃の姿に見えるようにして下さったのです。でも私が呪い殺そうと思っていた連中はすでに生きていませんでしたけど。ざまあみるよね。クック」

いや、そんなことよりも、と。俺は夢中になって問いただした。ボスの正体を。

「さあ？ 正体なんて存じませんわ。蜘蛛は蜘蛛でしたけども。アラ、あなたたひよつとして新参者ですの？ でしたらボスにご挨拶にみえないと。大変失礼ですわよ。ボスもお怒りじゃないのかしら」俺の額から、もみあげ辺りを伝って汗がひと筋流れ出た。俺の脳裏にあるフリーズが蘇る。

『金出さんかいワレ』

そしてヤクザが思い当たった。

俺は全くの冗談だと思い込んでいたのだが、まさかあれは例えはシヨバ（場所）代を払えとかいう遠回しの脅しだったのではないだろうか。うわ、何だかもうそれしか思い浮かばない。

「あゝあ。知くらない、どうなつても……」

女の幽霊は薄情にもさっさと消えた。

恐怖が残る。

ズルズルと椅子から滑り崩れるようにして、先に床へと落ちていた毛布の上に俺は尻をついた。

俺は手紙を書いた。

『拝啓、蜘蛛様。挨拶が遅れましたことをお詫び申しあげます。ホビーショップ“カ・ミューン”の店長であります、澤田慧太と申します。あなた様の数々の芸術作品に、ただただ感動をさせて頂いています。残念ながら店の営業上、撤去せねばならないことを非常に

勿体なく悲しく思うばかり。先ほど、あなたのことを知っている幽霊の方からあなた様のことを聞き、ペンをとった次第でございます。聞けば、この辺り一帯で活動しようとするならば、取り仕切っているあなた様の許可が必要とのこと。無知だった自分を恥ずかしいとは思いますが、どうかこんな店長である私に営業の許可を頂けないでしょうか。お願い致します。』

長々と、腫れ物に触るくらいの慎重さと丁寧さで文をしたためる。綴った紙を綺麗にたたんで売場の目立つ所に置き、俺は店を後にした。もう真夜中だった。パチンと照明の電源スイッチを切ると、店の中は非常灯だけを薄ぼんやりと残し暗くなって、辺りは再び静かな眠りにとついていった。

家に帰って就寝した後……。

朝になって舞い戻り、俺は開店時刻前に店へと着く。寝に帰ったはずだったのだが、置いてきた手紙の返事が気になって気になって仕方がなく、あまり眠れはしなかった。

鍵を開け、飛び込むように早足で売場へと突き進む。危うく、積まれた段ボールに当たりそうになりながら。辿り着いた売場で見た物は。

『許可スル』

空中で糸が編まれ、そう大きく文字が踊っていた。

……やった！俺は思わずガッツポーズをしてしまった。しかし文章はこれだけでは終わってはいない。続きが小さくズラズラと書き並べられていた。

『当事者である蜘蛛は場を提供するにあたり当事者の故意又は重大

な過失に基づく債務不履行または不法行為に起因して利用者に損害が生じた場合、利用者に対し当該損害を賠償するものとし、また当事者は利用者に対し、場を提供するにあたり当事者の過失に基づく債務不履行または不法行為に起因して利用者に損害が生じた場合、現実、直接かつ通常の損害に限り賠償するものとする。尚、この場合において当事者は利用者に発生した使用機会の逸失、業務の中断、又はあらゆる種類の損害（間接損害、特別損害、付随損害、派生損害、逸失利益を含む）に対し例えば当事者がかかる損害の可能性を事前に通知されていたとしてもいかなる責任も負わないものと……』

そこには何処その契約書並みな条項がずつつと説明されていた。正直しんどい。読むのかこれ。

俺は頂垂れながらも早く読んで片付けないと店が開けられないという恐怖観念に悩ませられ、そして何とか頭に叩きこもうと泣きながら読んでいった。

店を開けた時には、眩しい太陽の光が店内に差し込んで俺の泣きはらした顔を明るく染め上げていつてくれている。

結局、俺は蜘蛛の正体が判らなかつた。ボス、というだけ。

もう売場にアーチクな芸術作品を生み出すことはなくなつた。一体あれも何だつたのだろうと考える。やはり遠回しな脅し文句だつたのだろうか。だとしたら、遠回し過ぎるだろう。絶対に気がつかない。

それとも俺はボスに遊ばれていたのだろうか。躍起になって巢を破壊しまくっていたのは加代子さんだつたのだが。俺は毎日、今日はどんな芸術がこんな狭つちい売場で作られているのだろうと内心ワクワクしてすらさえたのだ。加代子さん達には悪いが。

「おじちゃん！ この商品いくらすんのー」

日中、店のレジカウンターで在庫と書類の整理をしていると、売

場内をウロチヨロしていた小学生2、3人ほどが俺に大声で元気に聞いてきた。シヨウケースの中の未開封だったブースターパックBOXをひとつ指さして。「どれどれ……」俺は作業の手を止めて、子ども達の所へ。接客をしなければ。お客を待たせてはいけないぞ。まだ三十路前だというのにこの子どもは俺をおじさん呼ばわり。しかし怒るな。嘆いてる暇はない。

俺が選んだ道よさて。今日もこれから営業だ。

俺は晩まで店で働く。今日も明日も変わらずに。別に変わらなくても今はいいのだが。ただ平穩無事に毎日を過ごしたいと思うだけなんだ。

明日の朝、開店しようと俺がいつもの通りに売場に現れた時。俺は久しぶりにボスもとい蜘蛛のアート・メッセージに、新たな悩みを抱えることになる。

伝えられたメッセージはこうだ。何と今回は白い糸ではなく淡いピンクに染まっている。技は磨かれていつているらしい。さて、メッセージは何と

『好きです。付き合ってください』

……どうしたらいいのだろう。

《END》

後編（後書き）

ご読了ありがとうございました。
職業柄、経営者の皆さんを応援します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4486f/>

蜘蛛絵図 [クモアート]

2010年10月8日15時43分発行